順接型接続詞の意味と用法（1）

――ダカラ・ソノ結果・従ッテ・スルト・ソコデ・ソレデ――

塩　澤　和　子

1. はじめに

接続詞は，文章中で前後の語，句，文を結びつけ，関係付けを示す働きを持つ品詞である。前件の内容と後件の内容とがどのように論理的に関係づけられるのかを示す指標として文章中で機能する。時枝誠記（1950）は，接続詞を二つの事柄をどう捉えるかという「話手の立場の表現として辞に所属させるべきもの」とし，文章論の立場から，「文章を思想の展開と見るとき，文章を構成する個々の文の関係」付けに重要な役割をもつ接続詞に注意し，論ずべきことを説いている。時枝誠記が文法論の領域に文章論を加えることを提唱して以来，接続詞の研究が語論，文論のレベルだけではなく，文章論的観点から推進され，発展してきたことは，「接続詞研究に大きな光明をもたらした」（森田良行『言語活動と文章論』P30）といえるが，しかし今後の課題として残されている問題も多い。その一つが，従来，一般的な意味・機能を中心に類型化される傾向のある接続詞について，個別の語ごとの意味・機能，使用領域ごとの差異を検討し，その特性を説明することではないかと思う。

文章論の立場から接続詞の扱いを見ると，たとえば永野賢は，『文章論総説』で，「連接関係の類型」の観点から9類型を立て，この中の7類型で接続詞を取り上げている。ただここには実例が乏しいため，その概要は『学校文法　文章論』（P86）の方で確かめることができるが，いずれにしても各類型に該当する実例を列挙するのみで，たとえば展開型に属する「だから・それで・それゆえ・ゆえに・したがって・そこで・すると・かくて」の意味・用法上の差異にまで言及してはいない。また市川孝も同様に，接続詞を三類七種に類別するが，個別の差異にまで触れてはいない。

これらに対し，森田良行著『基礎日本語辞典』『基礎日本語2』のように，個々の接続詞の意味・用法上の差異を記述したものもある。これは辞典として

の制約上，用例の扱いに限界があるが，現在最も詳しい記述がなされていると評価されるものである。この他には，一つ（又はそれ以上）の類型を中心に接続詞の意味・用法を扱った論文が幾つか散見する。たとえば，逆接型に関しては，佐竹邦子「逆接の接続詞の意味と用法」，岩澤治美「逆接の接続詞の用法」など(註1)，また順接型に関しては，ひけひろし（1986・9）「接続詞『そこで』『それで』」，ひけひろし（1987）「『それで』『だから』『したがって』」など，そして添加型では，ひけひろし（1985・12）「『そして』と『それから』」などがある。

また近年は，日本語教育の方面で，従来，研究対象が書き言葉（文章語）に偏る傾向があったのに対し，それとは異なる用法を持つ場合もある対話場面に注目し，コミュニケーション能力の観点から，接続詞の機能を見直す動きも見られる。蓮沼昭子（1991）「対話における『だから』の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要4』，有賀千佳子（1993・3）「対話における接続詞の機能について――『それで』の用法を手がかりに――」，浜田麻里（1995・5）「いわゆる添加の接続語について」などである。(註2)

こうした個別の接続詞の意味・機能上の差異，あるいは対話の場面での用法などに注目した論考は，接続詞の一般的な意味用法の説明だけでは現実に即さず，実際の場面での使用，文章分析に対応できない現実を物語っているといえよう。接続詞について，田中章夫（1987）は，「近代・現代の日本語の接続詞は，古代から現代にいたる各時代の接続詞のオンパレード」の観があるが，それらは「決して平面的ないし並立的に」使用されているのではなく，一つ一つが「独自のテリトリーをもち，いわば住み分けの様相を呈している」という。ここでは，口語文と文語文の差異，文章のジャンルの違いなどを問題としているが，こうした「住み分けの様相」は，単に文体上の問題ばかりではなく，同一文章内にも観察される接続詞の使用領域に関わる問題でもある。

そこで本稿では，接続詞の意味・用法上の相違を客観的に測る方法がないものかと考えて，順接型の6種の接続詞――ダカラ．ソノ結果．従ッテ．スルト．ソコデ．ソレデ――を取り上げ，一つの調査を試みた。被験者は「文章論講義」の受講者で，1学期に，接続詞の講義を受講した学生である。接続詞に関して予備的な知識があり，一般的な傾向を測る目安にすることが出来るのではないかと判断して，調査に協力してもらった。ただし被験者数が少ないため，得られた結果がどこまで一般的な傾向を示しうるものであるかは判断しがたいが，調査の結果を見る限り，使用者側の意識では，6種の接続詞が相互に関連を持

ち，あるいは対立し合いながら，各々独自のテリトリーをもっている現実があることを確認することが出来たように思う。本稿はその調査結果の報告である。

2. 先行研究に見る接続詞の分類

接続詞については，その種類，意味機能の分類に関して種々の説があり，現在，統一的な見解が見いだされるまでに至っていない。そこでまず本稿で取り上げる6種類の接続詞について，主だった説でどのように扱われているのか，分類基準，意味分類の方法等に関し確認しておきたい。考察する前に，主だった先行研究での扱いを一覧表にすると，〈表A〉のようになる。

表A　6種の順接型接続詞　諸説一覧

種　類	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
永野　賢1968	展開型		展開型	展開型	展開型	展開型
塚原鉄雄1969	展開的連接		展開的連接	展開的連接	展開的連接	
	論理的展開		論理的展開	段階的展開	段階的展開	
	順態—条件		順態—列叙	前提—条件	前提—条件	
市川　孝1978	順接—順当	順接—結果	順接—順当	順接—きっかけ	順接—順当	順接—順当
田中章夫1987	承前の接続		承前の接続	承前の接続	転換の接続	承前の接続
	原因・結果		原因・結果	継時的		継時的
佐治圭三1987	順接—確定		順接—確定	順接—仮定/確定		順接—確定
横林宙世他1988	順接—帰結	順接—帰結	順接—帰結	順接—展開	順接—展開	順接—展開

まず永野賢（1968）は，「連接関係の類型」の中で接続詞を「接続の意味関係」により7類型に分類するが，ここで取り上げる6語（「ソノ結果」を除く）は「展開型」として一括処理している。「展開型」とは，「前の事がらを原因・理由とする結果や結末が，次にくることを表わすもの。また，事が順調に運ぶ場合のきっかけや前おきなどを表わすもの。」（P86）であり，ここには「原因と結果」の関係づけをするもの，「きっかけ・前置き」として機能するものと，2つの意味機能を含めていることが確認される。

塚原鉄雄（1969）は，接続詞の接続機能（連接機能）を分類し「二種八類を措定」する。二種は「展開的連接」「構成的連接」で，前者はさらに「論理的

展開—順態/逆態」と「段階的展開—前提/累加」の四類に，後者は「連続的構成—解説/同列」と「断絶的構成—対比/転換」の四類に下位分類される。また八類の中は「連接の方法」により「条件連接」と「列叙連接」の二項に分類される。塚原は6語の内4語しか例示していないが，4語はすべて「展開的連接」に分類され，その中で「ダカラ（条件連接）・従ッテ（列叙連接）」は「論理的展開—順態」に，「スルト（条件連接）/ソコデ（条件連接）」は「段階的展開—前提」に分かれる。塚原は「前件の存在が，後件の成立に関与する程度」の強弱の度合いにより，「順態→逆態→前提→前提→累加→……」の順序で，強度から脆弱へと「漸次，移行すると認定しうる」（P70）とする。従って「条件と帰結との連接的緊密性」が最も強度なのが「ダカラ・従ッテ」であり，それより2段階程度稀薄になるのが「スルト・ソコデ」となる。また「連接の方法」の二項分類について，「条件連接では，相対的に論理性が明白で」あり，「列叙連接では，相対的に情感性が濃厚である」といえるため，前者は「連接の論理を端的に表現する方法」，後者は「連接の論理に情感を賦与する方法」という2方法が「主体の態度を表現する方法」として，存在することを認めている（P71）。従って，「相対的に論理性が明白」なのが「ダカラ・スルト・ソコデ」，「相対的に情感性が濃厚」なのが「従ッテ」ということになる。

市川孝（1978）は，文の連接関係の基本的類型として8類を立て，これを「文脈形成の特色」から3グループ，すなわち，1「論理的結合関係＝順接型・逆接型」，2「多角的連続関係＝添加型・対比型・転換型」，3「拡充的合成関係＝同列型・補足型・連鎖型」に分類整理する。6語はすべて「順接型—前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型」に属し，さらに「ダカラ・従ッテ・ソコデ・ソレデ」は「順接型—順当」，「ソノ結果」は「順接型—結果」，「スルト」は「順接型—きっかけ」に，各々下位区分される。

田中章夫（1987）は，接続詞を「文や語句の結びつき方の面」を基準に3分類，すなわち「対等の接続」「承前の接続」「転換の接続」とし，各分類に属する接続詞を下位項目の形でいくつかの語群にグループ分けする形を取っている。「転換の接続」の「ソコデ」以外はすべて（「ソノ結果」はない）「承前の接続」に属するが，このうち「ダカラ・従ッテ」は，「原因，理由，根拠などを導いて，結果，結論，帰結に結びつける接続詞」に，「スルト・ソレデ」は「継時的に起こる事象を接続する接続詞」に分類される。この下位分類は塚原鉄雄の「論理的展開」と「段階的展開」の2分類に通じるものがあるが，しかし「ソコデ」に関しては塚原鉄雄が「段階的展開」で扱っているのに対し，田

中章夫は「転換の接続」として処理するなど，この語の認識に関しては両者間の差異は大きい。

佐治圭三（1987）は，接続詞の「言葉のいろいろな段階のものを結び合わせる」機能を分類の前提とし，接続詞の現れる位置，結合させる言語単位相互の関係を分類の第一基準とする。実際には「文の内がわの接続詞」すなわち「文中に現れて，文の内がわの要素（略）を結び合わせるもの（並立）」と，「文の外がわの接続詞」すなわち「原則として文頭に現れて，その文の外側のもの（略）に結び合わせるもの」に2大別する。後者には「文の内がわにも現れうるもの＝並列の接続詞（並立/注釈/列叙）」「文の外がわにしか現れないもの＝条件の接続詞（順接/逆接）」「話題の外がわの接続詞＝転換の接続詞（転換）」の3種類が含まれる。ここで扱う6語の内4語は「文の外がわの接続詞」で「条件の接続」の「順接」に当たる。「順接」はさらに「仮定」か「確定」，あるいは2つを兼備するものに分かれる。「ダカラ（確定）・従ッテ（確定）・スルト（仮定/確定）・ソレデ（確定）」の4語は，前件の叙述内容を受け，それを条件（仮定条件/確定条件）と見なして後件に繋ぐ働きは同一であって，ただ差異として「スルト」だけが2つの条件を兼備した機能を担っているということになる。なおここには「ソノ結果・ソコデ」の扱いはない。

横林宙世他（1988）は，「外国人のための日本語　例文・問題シリーズ」の1つで，日本語教育のテキストとして編集されている性格上，新たな意味機能の分類を打ち出してはいない。ここでは市川孝の意味分類を基準に3分類し，1「二つの事柄を論理的関係でつなぐ表現」，2「二つ以上の事柄を別々に述べるのに用いる接続の表現」，3「一つの事柄を拡充して述べる表現」とする。1に「順接」「逆接」の2つを含んでいる点，先述の市川孝の3グループ分け（1論理的結合関係―順接型/逆接型）に通じるが，下位区分は必ずしも同一ではない。「順接」に属する「ダカラ・ソノ結果・従ッテ」は「先に理由を述べ後に結果を述べる言い方（帰結）」に，同じく「スルト・ソコデ・ソレデ」は「話が発展していく言い方（展開）」に分けており，市川孝が「ダカラ・従ッテ・ソコデ・ソレデ＝順接型―順当」と1グループ化するものを，横林他は「ダカラ・ソノ結果」と「ソコデ・ソレデ」と，2グループ化し，さらに後者に市川が別グループとする「スルト」を含めるなど，細かな分類になると微妙なずれが確認される。

以上見てきたように，接続詞として認定する語句の範囲，分類基準，意味機

能の分類など，先行研究での扱いはそれぞれ独自のものがあって，ここで取り上げる6語を「順接型」という1類型の枠内で扱うことの難しさが確認される。しかも6語の中には，たとえば「ソノ結果」のように市川孝だけが接続詞と認定するものもあるし，「ソコデ」や「ソレデ」のように，6文献中5文献でしか取り上げていないものもある。また分類基準に関しても，結合の緊密度を観点にするものもあれば，結合方法に注目するもの，接続方法と意味機能とを考慮したものなどがあり，基準の立て方は一定していない。従って，本稿では，市川孝の分類基準に準拠して，順接型として6語を扱うことにする。

3. 順接型接続詞の調査概要

被験者は文章論の受講者26名である。彼らを被験者に選んだのは，接続詞に関する問題意識と予備的な知識を有していると判断したことによる。調査方法，被験者，14の例文の選択基準は以下の通りである。

3.1 調査方法

調査に当たっては，問題文として14種類の例文（連文型）を提示し，その連文中で6種類の接続詞を使用する際，自然な日本語の表現として「可能」か否か，各例ずつ判断してもう方法を採った。具体的には，用紙に記載してある14種類の文例について，被験者個人の判断で，「可能」＝○，「不可」＝×，「不明」＝△（「不明」は判断保留の意），いずれかを記入するよう指示した。1週間後に用紙を回収した。被験者，調査期間は次の通りである。

被 験 者：筑波大学　人文学類1，2年次生　計26名

調査期間：平成8年5月

3.2 文例選択

文例は，『接続の表現』（参考文献14）所載の例文（以下，テキストと呼ぶ）を参考にした。一部語句を変更して使用した箇所がある。テキストの例文を借用したのは，日本語教育用のテキストとして，典型的な文例を取り上げていると判断したことによる。テキストでは，各語ごとに3，4例ずつ模範例（練習問題も含める）を挙げているため，そこから2例ずつ採用した。ただしスルトは，a，b 2つに意味分類されているため，その分類に従い，スルトa，スルトbに分けて文例を採用した。なお，ソレデも2分類（ソレデa，ソレデb）

されているが，ソレデbは会話の場面での使用に限定しているため，本稿では取り上げなかった。

以上の基準から，6種の接続詞に関し以下の14の文例を得た。

3.3 文　例

調査用紙に記載した文例は，次の14文例である。調査用紙には接続詞の意味は記入していないが，参考までにテキストで説明する意味を記し，該当する文例を例示する。文例の冒頭に付した番号（1，2，3…）は調査用紙での配列順を示す。

Aダカラ：前の事柄の当然の結果として後の事柄が起こるという話し手の判断を示す。

2①これは無農薬のリンゴです。　②安全です

9①今までの車は古くなってしまった。　②新しいのを買うつもりです。

Bソノ結果：前の事柄が原因，理由となって，後の結果が起こるという意味。

1①入試制度が変わった。　②前よりいっそう受験生の負担が増えることになった。

8①象牙が獲れるというのでアフリカ象を乱獲した。　②象は絶滅寸前に追い込まれてしまった。

C従ッテ：「だから」と同じような意味だが，理由よりも結果を強調する。

3①日本は火山が多い。　②温泉も多い。

10①京都は千年もの間日本の都であった。　②古い伝統が今も残っている。

Dスルトa：ある物事に続いてほかの物事が起こる場合に使う。後件は過去形。

11①おばあさんが桃を二つに割りました。　②元気な男の子が飛び出してきました。

4①「開けゴマ」と言ってみた。　②扉が開いた。

スルトb：今まで聞いたことなどを理由とすれば，当然，次のように考えられると言う意味。[結論]。

12①日本の人口は1億3千万人ぐらいで東京にはその十分の一が住んでいます。　②東京の人口は1千3百万人ぐらいですか。

13①サラ金に迫われていたA氏が大金をもっているという噂だ。　②やはりA氏は犯人に違いない。

Eソコデ：前の事柄を受けて場面を設定し，それに対する意志的行動か，自然

ななりゆきを述べる。後ろの文は動詞文。

5 ①電話のベルが鳴った。　②受話器を取った。

14①もうあまり時間がない。　②タクシーで駅へ急ごう。

F ソレデ：「前の事柄が理由で，こうなってしまった」という事態を客観的に述べる。

6 ①私はこの頃甘いものばかり食べています。　②太ってしまいました。

7 ①あの人は頑固者らしい。　②周りの人間は困っているようです。

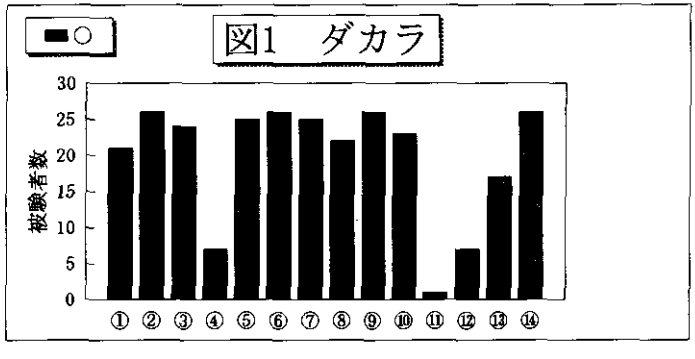
それでは以下，各語の結果を数値表とグラフによって表し，考察していくことにする。なお各文例ごとの結果は，付録（NO 1 ～NO14参照）として本稿の最後に載せておく。

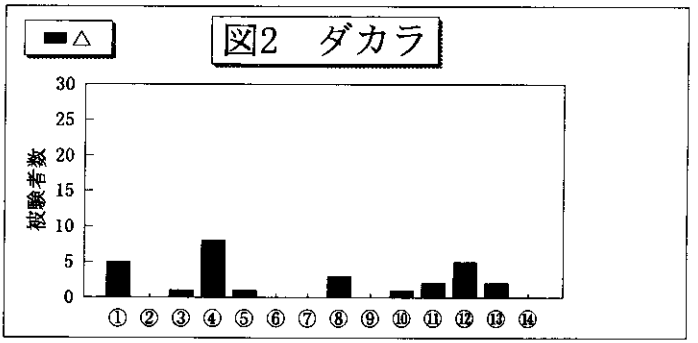
4. 順接型接続詞 6 種の調査結果

4.1　ダ カ ラ

表1　ダ　カ　ラ

文 例		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
だから	○	21	26	24	7	25	26	25	22	26	23	1	7	17	26
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
だから	△	5	0	1	8	1	0	0	3	0	1	2	5	2	0
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
だから	×	1	0	1	11	0	0	1	1	0	2	23	13	7	0





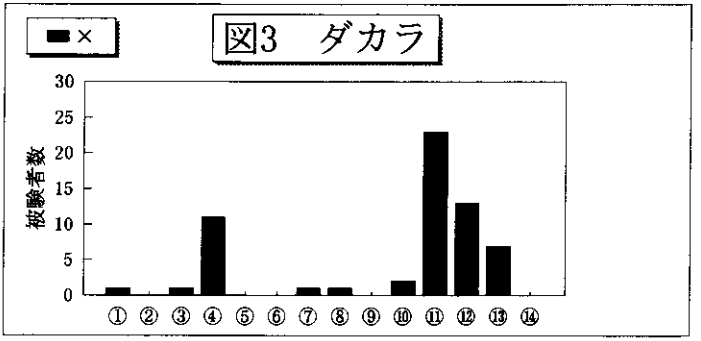


表1には文例番号を1，2…ではなく①，②…で示した。下段の数値は被験者数を表す。以下同じ。

まず，全体的に「可能」「不可」「不明」の傾向を見ると，ダカラは「可能」と判断される文例が高支持率で広範囲に渡ることが確認される。80%（21名）以上の支持率が14文例中10例文（1．2．3．5．6．7．8．9．10．14）あり，このうち6文例（アンダーラインの番号）は25名以上の支持がある。それに対し「不可」で高支持率の文例は僅かで，80%以上は1文例（11）だけである。残り3文例（4．12．13）は，被験者の判断が分かれ，判定結果に揺れが認められる。このうち13は「可能」の，12は「不可」の支持率の方が幾分高いが，4は「可能」「不明」「不可」がほぼ近値で並び，判定が三分された感がある。

以上の結果を「置き換え」の観点から見ると，たとえば「可能」の支持率の

高い文例の接続詞は，ダカラへ置き換えることが可能であり，逆に「不可」の支持率の高い文例の接続詞は，ダカラへ置き換えると日本語として不適切な用法になると解せよう。また，「可能」「不可」「不明」がほぼ同率であるのは，個人差が大きく，基準が確定せず，「揺れ」があると見なせる。

そこで「置き換え」の可能性に注目して，〈表1〉の結果を基に，各文例に相当する接続詞を書き出すと，〈表1—1〉のようになる。

〈表1—1〉　ダカラをAに置き換える
（接続詞に後続する（　）内の数値は文例番号を示す）

%＼Aニ	［可　　能］	「不　　可」	揺　　れ
80%以上（21名～）	ダカラ（2．9） ソノ結果（1．8） 従ッテ（3．10） ソコデ（5．14） ソレデ（6．7）	スルトa（11）	スルトa（4）
70～79%（19～20名）			
60～69%（16～18名）	スルトb（13）		
50～59%（13～15名）		スルトb（12）	

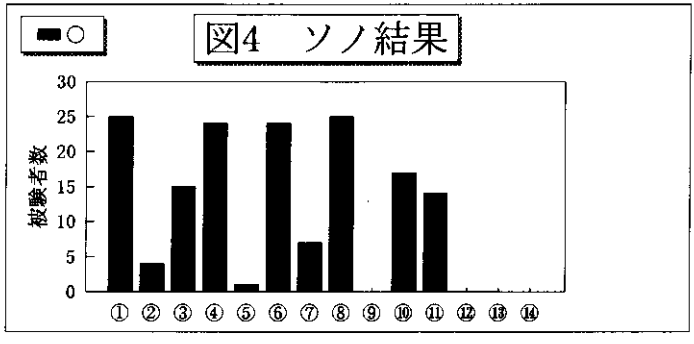
表には，各接続詞がどの程度の比率で置き換えが可能（不可）かを示してある。ダカラ（2．9），ソノ結果（1．8），従ッテ（3．10），ソコデ（5．14），ソレデ（6．7）は，80%以上を占めており，置き換えの可能性は高いといえる。特にソコデ，ソレデ（ダカラは当該例なので除く）は25名以上の支持があるため，ほぼ完全に置き換え可能と見てよいであろう。

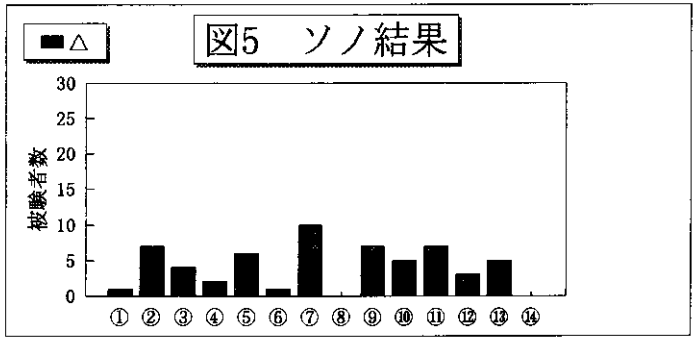
それに対し，スルトaは，「不可」と「揺れ」ともに80%以上を占めているし，スルトbも「可能」「不可」ともに比率が低い。スルトを要求する文脈にはダカラの置き換えが不可（又は困難）と判断できる。スルトの適用される文例ではダカラは何らかの使用制限を受けることが予測されるのである。

4.2　ソノ結果

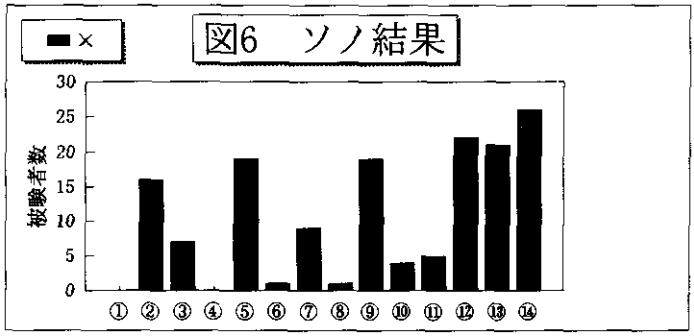
表2　ソノ結果

文例		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
その結果	○	25	4	15	24	1	24	7	25	0	17	14	0	0	0
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
その結果	△	1	7	4	2	6	1	10	0	7	5	7	3	5	0
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
その結果	×	0	16	7	0	19	1	9	1	19	4	5	22	21	26





ソノ結果は，ダカラに比べると，「可能」で高支持率の文例が減少し，14文例中80%以上の支持が4例（1．8＝25名，4．6＝24名）だけである。それ



に対し「不可」の高支持率の文例が増加し，80%以上の支持が3例（14＝26名，12．13＝21，2名）で，さらに70%以上まで広げると2例（5．9＝19名）が加わり，計5例となる。

これらに対し，残り5例（2．3．7．10．11）は，「可能」か「不可」か決めがたく，判断に個人差が大きく出ている。ただし，3．10．11は幾分「可能」の方が，2は幾分「不可」の方の支持率が高いと見ることは出来る。しかし，7は「可能」「不可」「不明」と判定が3分され，しかも「不明」が最多という結果で，個人差が非常に大きく，問題となる文例といえよう。

次に，ダカラと同様，「置き換え」の可能性に注目して，〈表2〉の結果を基に，各文例に相当する接続詞を書き出すと，〈表2―1〉のようになる。

「可能」の方では，スルトa（4），ソレデ（6）は，ともに80%以上であるため，一応置き換えの可能性は高いといえるが，もう一方の文例は決して高くない。たとえば，スルトa（11）は「可能」の50%台，ソレデ（7）は「揺れ」に，それぞれ属している。従って両者を併せて判断すると，「ソノ結果をスルトa，ソレデに置き換えが可能である」と解するには無理がある。このように同一の接続詞を使用する2種の文脈において，一方では他の接続詞への置き換えが可能と判断する被験者が多いのに，他方ではそうでないのは，一体どのような理由によるのであろうか。今後この点に関して，文相互の意味関係を検討するなど，考察の必要性を痛感する。

「不可」の方を見ると，スルトb，ソコデ，ダカラなどは，その傾向が強く，従ッテも，「可能」の比率が低い点から見て，「不可」と見做す方が妥当であろう。

ソノ結果に関しては，置き換え可能と判断出来る接続詞が特定できないばか

〈表2—1〉　ソノ結果をBに置き換える

%＼Bニ	「可　能」	「不　可」	揺　れ
80%以上 (21名～)	ソノ結果(1．8) スルトa（4） ソレデ（6）	スルトb(12．13) ソコデ（14）	ソレデ（7）
70～79% (19～20名)		ソコデ（5） ダカラ（9）	
60～69% (16～18名)	従ッテ（10）	ダカラ（2）	
50～59% (13～15名)	スルトa（11） 従ッテ（3）		

りか，「不可」と判断される接続詞の方が多く，その種類も特定しやすい。しかもダカラをソノ結果に置き換えることは，80%以上「可能」と判断する被験者がいるのに対し，その逆は，60～70%の被験者が「不可」と判断しているのである。このような結果を見ると，ソノ結果は，ダカラに比べると，その適用範囲が狭く，意味機能がかなり限定されているといえよう。

4.3 従ッテ

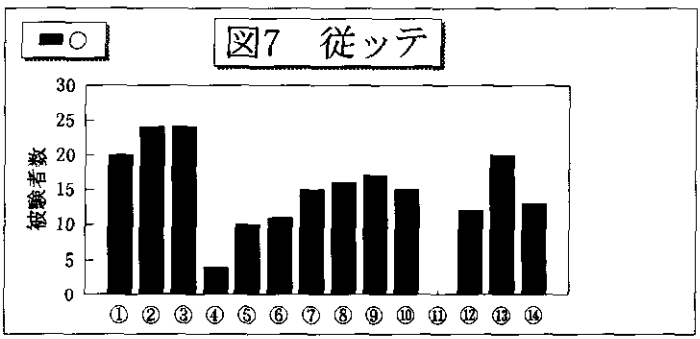
従ッテは，ソノ結果と同様，「可能」で高支持率の文例が減少し，14例文中80%以上の支持があるのは3例（2．3＝24名，13＝21名）で，それに70%以上（1＝20名）を加えても計4例だけである。また「不可」も80%以上は1例（11＝25名）のみである。

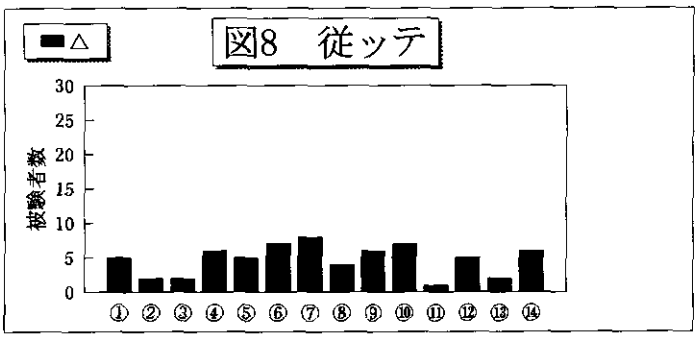
このように従ッテの場合，「可能」か「不可」か，大勢がはっきり分かれる文例は「可能」と「不可」を併せても5例だけであり，残り9文例は中間的な傾向を示すという結果が確認される。そのうち「可能」の支持者が50～60%台のは，5例（8．9＝16，7名　7．10＝15名　14＝13名）で，「不可」の支持者が60%台のが1例（4＝16名）であり，「可能」「不可」「不明」に3分される傾向を示すのが3例（5．6．12）となっている。

このような中間的な数値が多く現れる結果は，従ッテの意味・用法が被験者に明確に把握されてはいない，個人の理解の程度に差があるため統一されるまでに至っていないなど，原因をいろいろ推測することができるが，いずれにし

表3 従 ッ テ

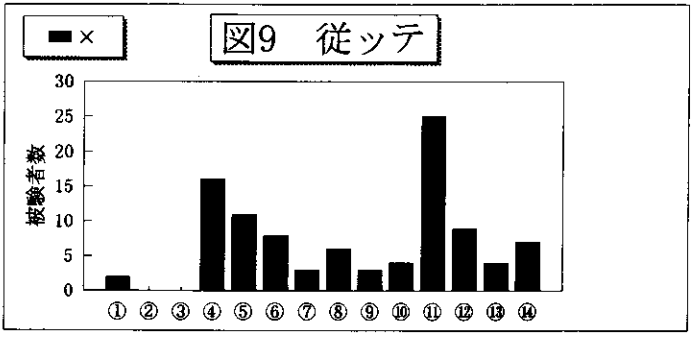
文 例		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
従って	○	20	24	24	4	10	11	15	16	17	15	0	12	20	13
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
従って	△	5	2	2	6	5	7	8	4	6	7	1	5	2	6
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
従って	×	2	0	0	16	11	8	3	6	3	4	25	9	4	7





ても，ダカラやソノ結果と違い，従ッテの適用範囲に関しては，判定に揺れが生じやすいという結果は注意される。

次に，「置き換え」に注目して，〈表3〉の結果を基に，各文例に相当する接



続詞を書き出すと，〈表3―1〉のようになる。

〈表3―1〉　従ッテをCに置き換える

C＝ ％	「可　能」	「不　可」	揺　れ
80％以上（21名～）	ダカラ（2） 従ッテ（3） スルトb（13）	スルトa（11）	スルトb（12） ソコデ（5） ソレデ（6）
70～79％（19～20名）	ソノ結果（1）		
60～69％（16～18名）	ダカラ（8） ソノ結果（9）	スルトa（4）	
50～59％（13～15名）	従ッテ（10） ソコデ（14） ソレデ（7）		

「可能」の方では，ダカラ（2），従ッテ（3），スルトb（13）が80％以上となっているが，先述のソノ結果と同様，もう一方の文例は，「可能」の比率が低かったり，「揺れ」に属していたりで，必ずしも2例そろって「可能」の支持が高いという結果とはなっていない。特に注意されるのは，テキストでは従ッテの文例となっている10が，「可能」の50％台の支持しか得ていない点である。これは文例自体に問題があるのか，それともテキストと実際の場面での使用意識に「ずれ」があるためか，判断しがたいが，この点に関しては，さら

に多くのデータを収集して検討する必要性を痛感する。

ソノ結果に関しては，2例とも60～70%台に位置しており，積極的に置き換えが「可能」とはいえないまでも，一応可能と見なせる範囲にあるといえよう。

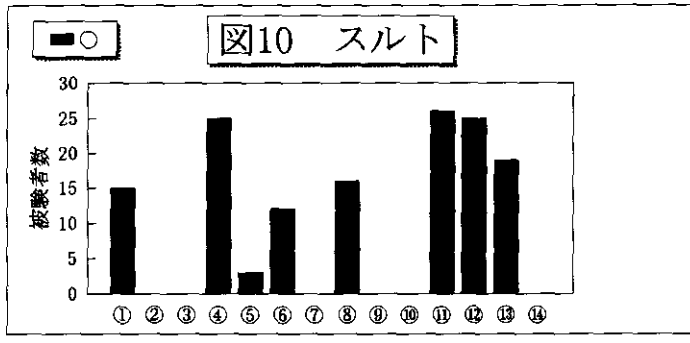
「不可」の方は，スルトaのみが80%以上と60%台に位置しているため，他の接続詞に比べれば，スルトaは「不可」の可能性の方が高いといえる。またソコデ，ソレデも，一方が「可能」で50%台，一方が「揺れ」と，これも置き換えは「不可」の傾向の方が強い。

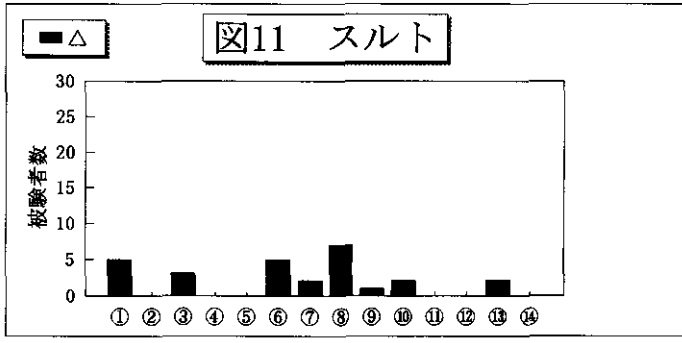
従ッテに関しては，ソノ結果と同様，置き換え可能と積極的に判断出来る接続詞を特定することができず，一応可能と見做す程度の接続詞（ソノ結果）があるだけである。それに対し，「不可」では種類は少ないが，スルトaのように「不可」の方のみに現れる接続詞があったり，ソコデ，ソレデなど「不可」の可能性の強い接続詞が存在するなど，「不可」の方は比較的特定しやすくなっている。従ッテもソノ結果と同様，ダカラに比べると，その適用範囲が狭く，意味機能がかなり限定されているといえよう。

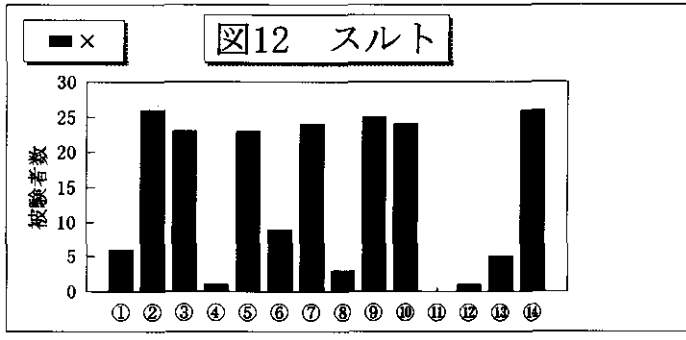
4.4 スルト

表4　スルト

文例		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
すると	○	15	0	0	25	3	12	0	16	0	0	26	25	19	0
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
すると	△	5	0	3	0	0	5	2	7	1	2	0	0	2	0
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
すると	×	6	26	23	1	23	9	24	3	25	24	0	1	5	26







スルトは,「可能」で高支持率の文例が少なく,80%以上は，3文例（4.11.12）で，すべて25名以上となっている。それに70%以上の1文例（13）を加えても4文例だけである。それに対し,「不可」では80%以上が，7文例（2．3．5．7．9．10．14）もあり，そのうち2文例（2．14）は26名全員の支持がある。スルトは「可能」「不可」の傾向がかなりはっきりした形で出ているが,「不可」の方が多い点から見て，スルトの使用可能範囲は非常に限定されたものであることが確認される。

以上に対し，揺れがあるのが3文例（1．6．8）で，このうち6は,「可能」と「不可」の差が僅か3名で，判断が二分された感があるが，残り2文例は，幾分「可能」の支持の方が多い。

次に,「置き換え」に注目して,〈表4〉の結果を基に，各文例に相当する接続詞を書き出すと,〈表4—1〉のようになる。

〈表4—1〉　スルトをDに置き換える

%＼Dニ	「可　　能」	「不　　可」	揺　　れ
80%以上 (21名～)	スルトa(4．11) スルトb(12)	ダカラ(2．9) 従ッテ(3．10) ソコデ(5．14) ソレデ(7)	ソレデ(6)
70～79% (19～20名)	スルトb(13)		
60～69% (16～18名)	ソノ結果(8)		
50～59% (13～15名)	ソノ結果(1)		

「可能」では，当該例のスルトのみが置き換え「可能」で，当該例以外には，ソノ結果が50～60%台にあるだけで，置き換えの可能性はあまり高くない。当該例では，スルトa(4．11)，スルトb(12)は共に25名の支持があるため，スルトの使用に問題はないといえるが，スルトb(13)は70%台に止まっているため，その使用の適否に関しては個人差が出ている。

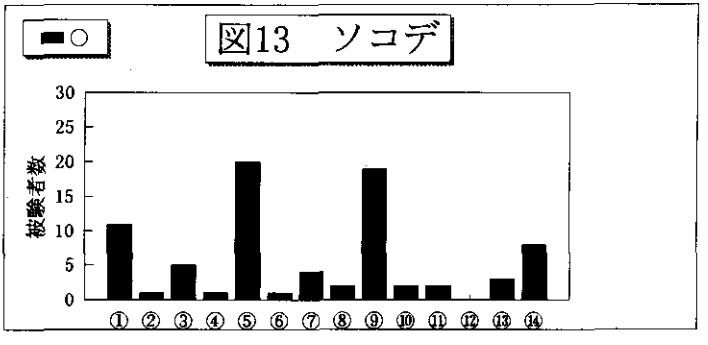
「不可」に関しては，「可能」よりも結果ははっきり出ている。ダカラ，従ッテ，ソコデ，ソレデがいずれも80%以上の数値で，「不可」を支持し，中にソレデ(6)の「揺れ」を含めているが，置き換えの可能性を否定する。

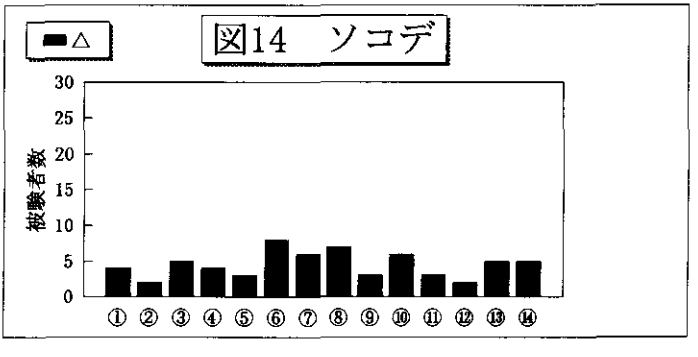
以上の結果から，スルトは，わずかにソノ結果への置き換えの可能性があるとはいえ，その可能性の比率は決して高くはないため，実際には他の接続詞への置き換えは不可能と見る方が妥当といえる。ダカラ，ソノ結果，従ッテに比べると，最も適用範囲が狭く，意味機能が限定されていることがわかる。

4.5 ソコデ

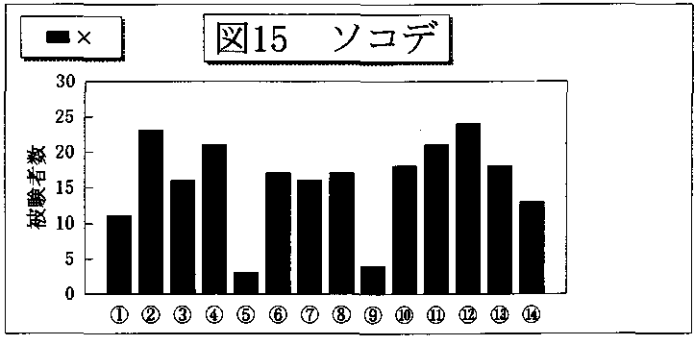
表5　ソ　コ　デ

文例		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
そこで	○	11	1	5	1	20	1	4	2	19	2	2	0	3	8
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
そこで	△	4	2	5	4	3	8	6	7	3	6	3	2	5	5
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
そこで	×	11	23	16	21	3	17	16	17	4	18	21	24	18	13





ソコデは，「可能」で高支持率の文例が極端に少なく，80%以上はなく，上限は70%台の2例（5．9）だけである。最高が20名で，19名がそれに次ぐ。



この2文例の後は大幅に水をあけて，11名（1），8名（14），5名（3）と続いていく。この結果から「可能」の範囲は，極端に限定されていることが分かる。

それに対して「不可」は，支持率の高い文例が広範囲に渡り，80%以上が4文例（2．4．11．12）あり，いずれも21，2名前後の支持者である。70%台はないが，60%台に6文例（3．6．7．8．10．13），16〜18名の支持者があり，ここまで含めると，「不可」に相当する文例は14文例中10文例にもなる。「可能」に対し「不可」の占める割合の多さが際だっている。

また「不明」はすべての文例に万遍なく，平均5名前後の数値で現れていることが確認される。

ここで60%以上を目安に「可能」と「不可」を分けると，「可能」の支持の高いのは5．9の2文例，「不可」は2．3．4．6．7．8．10．11．12．13の10文例となり，残り2文例（1．14）は「可能」とも「不可」とも決めがたい，判断が揺れている文例である。このうち1は，「可能」と「不可」が同数で対立し，判断が二分された形を取り，14は「不可」が半数を占め，残りは「可能」と「不明」に二分されている。いずれにしても個人差が大きく出た文例といえる。

次に，「置き換え」に注目して，〈表5〉の結果を基に，各文例に相当する接続詞を書き出すと，〈表5—1〉のようになる。

〈表5－1〉　ソコデをEに置き換える

%＼Eニ	「可　能」	「不　可」	揺　れ
80%以上 （21名～）		ダカラ（2） スルトa（4） スルトa（11） スルトb（12）	ソノ結果（1）
70～79% （19～20名）	ダカラ（5） ソコデ（9）		
60～69% （16～18名）		ソノ結果（8） 従ッテ（3．10） スルトb（13） ソレデ（6．7）	
50～59% （13～15名）		ソコデ（14）	

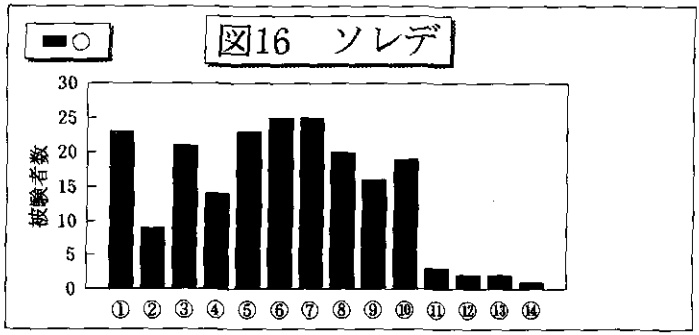
「可能」では，一応70%台のダカラ（5）とソコデ（9）に置き換え「可能」と見ることが出来るが，もう一方の例が「可能」の支持を受けていないため，置き換えを積極的に支持できるまでには至らない。特にダカラの一方の例（2）は「不可」で80%台を占めているため，ダカラへの置き換えには問題がある。また当該例でも，2例とも「可能」の支持が高いわけではなく，14などは「可能」が僅か8名（30%）で，「不可」が13名（50%）と，当該例としての面目丸潰れの感がある。これは，14がソコデの文例として不適切であるためか，模範例と使用者側の意識に「ずれ」があるためか，判然としないが，いずれにしても予想しない結果となった。

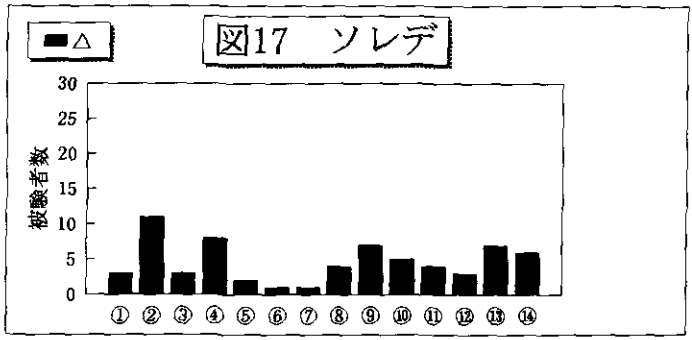
「不可」に関しては，置き換え「不可」と判断される接続詞が，比率の多寡はあるものの，本稿で取り上げた6種すべてにわたって観察される。先述したスルトの適用範囲の狭さを指摘したが，それ以上にソコデの置き換えの可能性の低さが指摘されるのである。

4.6 ソ レ デ

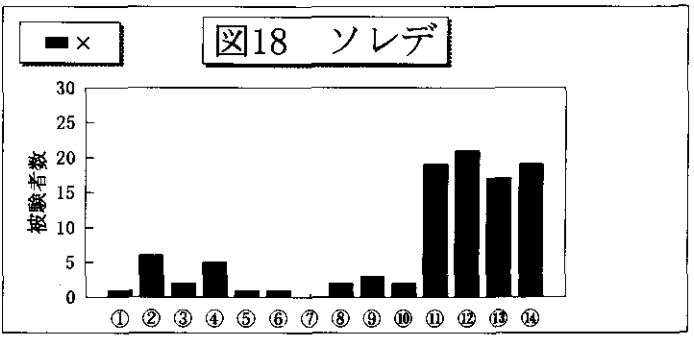
表6 ソ レ デ

文 例		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
それで	○	23	9	21	14	23	25	25	20	16	19	3	2	2	1
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
それで	△	3	11	3	8	2	1	1	4	7	5	4	3	7	6
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
それで	×	1	6	2	5	1	1	0	2	3	2	19	21	17	19





ソレデは，「可能」で支持率の高い文例が広範囲に渡っており，ダカラに次ぐ広がりを見せている。80%以上は，5文例（1．3．5．6．7）で，ここ



には25名以上が２文例ある。これに70％台］の２文例（８．10）を加えると計７文例，全体の半数になる。ダカラでは19名以上が10文例あり，６種の接続詞中，最も「可能」の範囲が広いが，ソレデはそれに次ぐ広がりを見せている。

それに対し「不可」で80％以上は，１文例（12）のみで，それに70％台の３文例（11．13．14）が続いている。

このように「可能」と「不可」にはっきり傾向が分かれる文例に対し，判断に揺れが確認されるのは，３文例（２．４．９）である。このうち２は「可能」と「不可」の差が僅か３名で，「不明」が11名（42％）も占めており，揺れの大きさを示している。４．９は，比較的「可能」の支持者が多いものの，「不明」が７，８名もおり，個人差が大きく出ている。

次に，「置き換え」に注目して，〈表６〉の結果を基に，各文例に相当する接続詞を書き出すと，〈表６－１〉（46ページ）のようになる。

置き換え「可能」として，70％台から80％以上を占める，当該例のソレデ（６．７）を初め，ソノ結果，従ッテがある。しかしソコデは５（「可能」の80％以上）に対し，14の方は「不可」で70％台を占めるため，２例揃って「可能」とはなっていない。またダカラも，９は「可能」の60％台だが，２の方は「揺れ」に属すため，置き換え「可能」とは判断しがたい。スルトａ，スルトｂとも「不可」の方の可能性が高いと見てよいであろう。

3. まとめ

接続詞の意味・用法上の相違を客観的に測る一つの新しい試みとして，日本語教育のテキストで使用している模範例を参考に，被験者の使用意識の観点か

〈表6—1〉　ソレデをFに置き換える

%＼F二	「可　能」	「不　可」	揺　れ
80%以上 (21名～)	ソノ結果（1） 従ッテ（3） ソコデ（5） ソレデ（6．7）	スルトb（12）	ダカラ（2）
70～79% (19～20名)	ソノ結果（8） 従ッテ（10）	スルトa（11） ソコデ（14）	
60～69% (16～18名)	ダカラ（9）	スルトb（13）	
50～59% (13～15名)	スルトa（4）		

ら，6種の接続詞が各々独自のテリトリーをもち，住み分けている実態を解明することを目指した。結果を見る限り，6種の接続詞は，対等の資格で独自のテリトリーをもちながら，住み分けているのではなく，むしろ重複したり，ある部分では包摂関係を保ちながら，あるいはある特定の接続詞とは対立関係を取りながら文脈中に機能していることが確認されたように思う。

たとえばダカラ，ソレデのように勢力範囲が比較的広く，大半の接続詞へ置き換えが可能な接続詞もあれば，スルトのように，ダカラを置き換えることが可能な接続詞群とは一線を画し，独自のテリトリーを持っていると判断される接続詞もある。また，接続詞によっては，「可能」と「不可」の支持率が比較的明瞭な形で現れるものもあれば，両者の境界が不明瞭で，「不明」の判断が文例全体にわたり，個人の判断が揺れたと推測されるものもある。また個人差が大きく「可能」と「不可」が二分される感のある文例もあった。以上の結果から，接続詞の意味・用法を規定するには，先行研究を参考にするばかりでなく，実際の場面での使用意識を考慮する必要があることを教えられたように思う。

今後は，本稿で得た結果を一つの目安として，さらに被験者数を増やし，より確実なデータを得ることを目指したい。それと同時に，本稿での調査結果を基に，個別の接続詞ごとの文脈上での意味機能を客観的に記述する方法を探っていきたいと考える。

[註]

註1

岩澤治美（1985）は，逆接の接続詞の用法として「逆接」「展開」「転換」「対比」「補足」の5つの用法を認め，各用法のジャンルごとの使い分けに論究する。また佐竹久仁子（1986）は，逆接の接続詞の現代語における意味・用法の整理，分析，記述を試みている。しかしこれらは，逆接の接続詞を研究対象にしているのであって，個別の語ごと（たとえば「シカシ・ダガ・ガ・デモ・ケレド・ケレドモ・ダケド・トコロガ……」）の意味機能の記述は取り上げていない。

註2

（1）ひけひろし（1986・9）「接続詞『そこで』『それで』」
　　『教育国語86』教育科学研究会・国語部会編
（2）ひけひろし（1987）「『それで』『だから』『したがって』」
　　『教育国語88』教育科学研究会・国語部会編

（1）は，意味と機能の類似する「そこで」「それで」を取り上げ，2語の機能，意味的違いを考察したもの，（2）は同じく意味的関係の類似する3語「それで」「だから」「したがって」を取り上げ，各語の使い分けに関して検討を加えたものである。（1）（2）ともほぼ共通の資料を対象に分析しているが，主として文学的文章の『平凡』『青年』『破戒』『暗夜行路』『千曲川のスケッチ』『蟹工船』『放浪記』『女坂』『真知子』『青春の蹉跌』など，近代文学に属するものが多い。（2）の方には多少「近代日本人の発想の諸形式」など論理的文章に該当する例が散見するが，全体的に見れば資料に偏りがあり，「ダカラ・従ッテ・ソコデ・ソレデ」の4語の意味機能の全容を記述するまでには至っていないといえる。

（3）森田良行（1980）『基礎日本語2』角川書店

見出し語に「従ッテ」「スルト」「ソコデ」「ソレデ」があり，「ソレデ」の関連語として「デ・ダカラ・デスカラ」を取り上げている。取り上げる接続詞の種類は多いが，本書は事典的性格が強く，紙幅に制限があるため，概要を知るには参考になるとしても，用例は少なく限られたものでしかないため，意味機能の分類には限界があるといえる。

（4）蓮沼昭子（1991）「対話における『だから』の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要4』

（5）有賀千佳子（1993・3）「対話における接続詞の機能について――『それで』の用法を手がかりに――」『日本語教育』79号

（6）浜田麻里（1995・5）「いわゆる添加の接続語について」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版（注：「ソシテ」「ソレデ」「ソレカラ」を取り上げる）

以上の3つは，主として対話場面における接続詞の用法に論究したものである。従来，分析の対象がややもすれば文章語に偏り，文章語を基準とする記述が行われる傾向が強かったが，実際の発話の場面での接続詞の機能を観察することで，接続詞の分類の枠組みを捉え直す必要性が提示されている。個別の語の意味機能を検討する上で参考になる論考ではあるが，（4）（5）では1語を取り上げているだけで

あり，（6）は，3語の比較を行っているが，順接型の接続詞の他に添加型も含み，しかも表現類型上の差異を問題にしているなど，語相互の意味機能上の共通点・相違点を正面から取り上げたものではない。

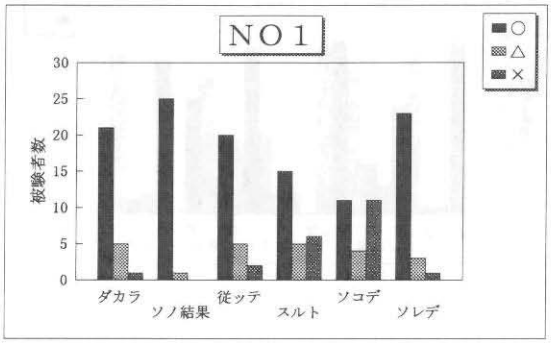
参考文献

1　時枝誠記　1950『日本文法　口語篇』岩波書店
2　永野　賢　1959『学校文法　文章論』朝倉書店
3　塚原鉄雄　1969・12「連接の論理」（『月刊文法』2－2　明治書院）
4　市川　孝　1978『国語教育のための文章概説』教育出版
5　森田良行　1980『基礎日本語2』角川書店
6　岩澤治美　1985「逆接の接続詞の用法」（『日本語教育』56　日本語教育学会）
7　ひけひろし　1985・12「『そして』と『それから』」（『教育国語83』教育科学研究会・国語部会編　むぎ書房）
8　永野　賢　1986『文章論総説』朝倉書店）
9　佐竹久仁子　1986「『逆接』の接続詞の意味と用法」（宮地裕編『論集日本語研究一』明治書院）
10　ひけ・ひろし　1986・9「接続詞『そこで』『それで』」（『教育国語86』教育科学研究会・国語部会編　むぎ書房）
11　ひけ・ひろし　1987・3「『それで』『だから』『したがって』」（『教育国語88』教育科学研究会・国語部会編　むぎ書房）
12　田中章夫　1987「接続詞の諸問題」（『研究資料日本文法4』明治書院）
13　佐治圭三　1987「文章中の接続語の機能」（『国文法講座6』明治書院）
14　横林宙世他　1988『外国人のための日本語例文・問題シリーズ6　接続の表現』荒竹出版）
15　森田良行　1989『基礎日本語辞典』角川書店
16　蓮沼昭子　1991「対話における『だから』の機能」（『姫路獨協大学外国語学部紀要4』）
17　有賀千佳子　1993・3「対話における接続詞の機能について――『それで』の用法を手がかりに――」『日本語教育』79号
18　森田良行　1993『言語活動と文章論』明治書院
19　浜田麻里　1995「いわゆる添加の接続語について」（仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版）

［付録］

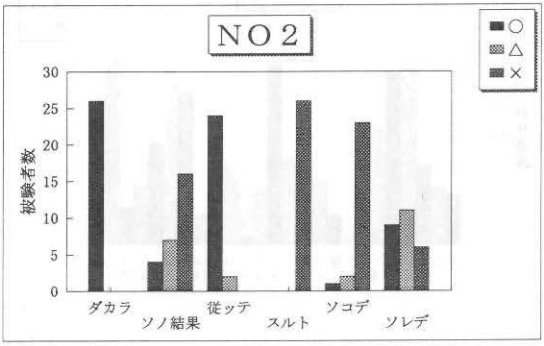
ＮＯ１　①入試制度が変わった。
②前よりいっそう受験生の負担が増えることになった

ＮＯ１	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	21	25	20	15	11	23
△	5	1	5	5	4	3
×	1	0	2	6	11	1



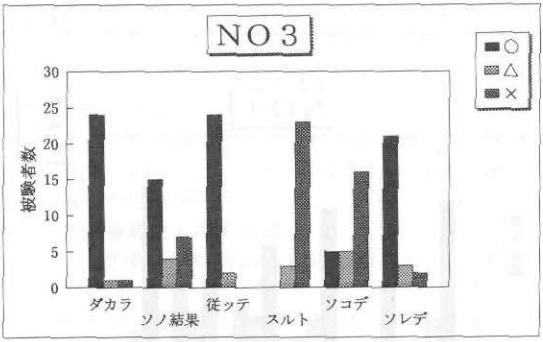
ＮＯ２　①これは無農薬のリンゴです。
②安全です。

ＮＯ２	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	26	4	24	0	1	9
△	0	7	2	0	2	11
×	0	16	0	26	23	6



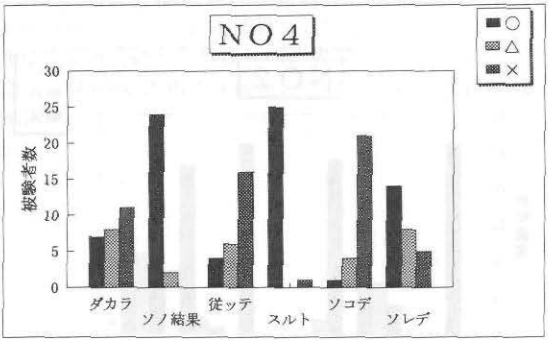
NO3 ①日本は火山が多い。
②温泉も多い。

NO3	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	24	15	24	0	5	21
△	1	4	2	3	5	3
×	1	7	0	23	16	2



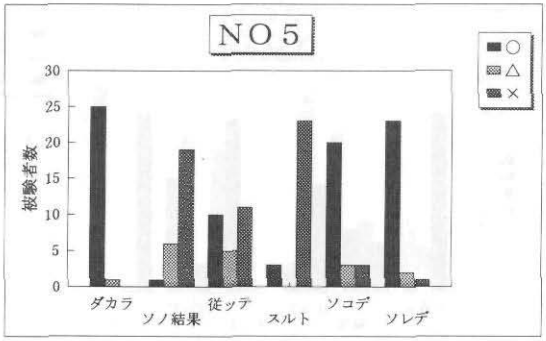
NO4 ①「開けゴマ」と言ってみた。
②扉が開いた。

NO4	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	7	24	4	25	1	14
△	8	2	6	0	4	8
×	11	0	16	1	21	5



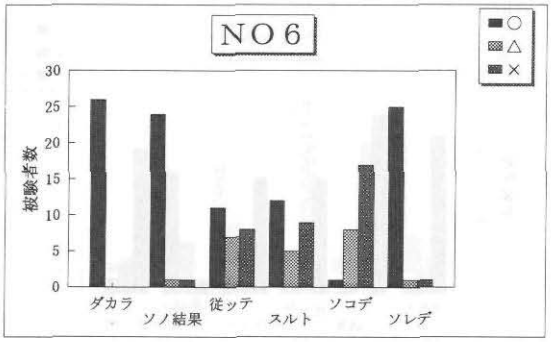
ＮＯ５　①電話のベルが鳴った。
②受話器を取った。

ＮＯ５	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	25	1	10	3	20	23
△	1	6	5	0	3	2
×	0	19	11	23	3	1



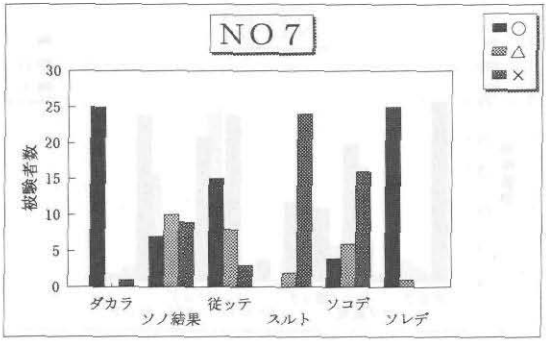
ＮＯ６　①私はこの頃甘いものばかり食べています。
②太ってしまいました

ＮＯ６	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	26	24	11	12	1	25
△	0	1	7	5	8	1
×	0	1	8	9	17	1



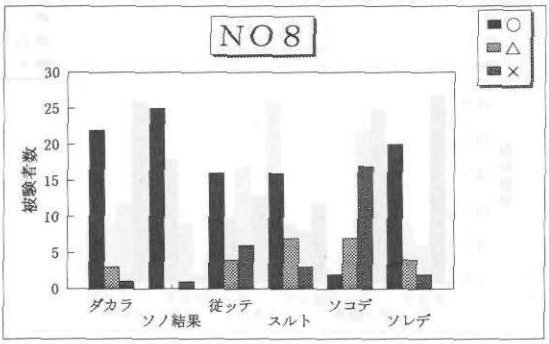
NO7　①あの人は頑固者らしい。
　　②周りの人間は困っているようです。

NO7	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	25	7	15	0	4	25
△	0	10	8	2	6	1
×	1	9	3	24	16	0



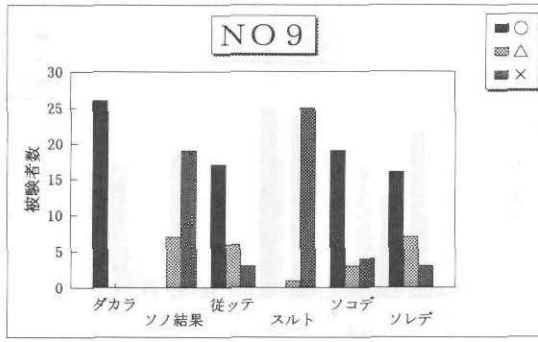
NO8　①象牙が獲れるというのでアフリカ象を乱獲した
　　②象は絶滅寸前に追い込まれてしまった。

NO8	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	22	25	16	16	2	20
△	3	0	4	7	7	4
×	1	1	6	3	17	2



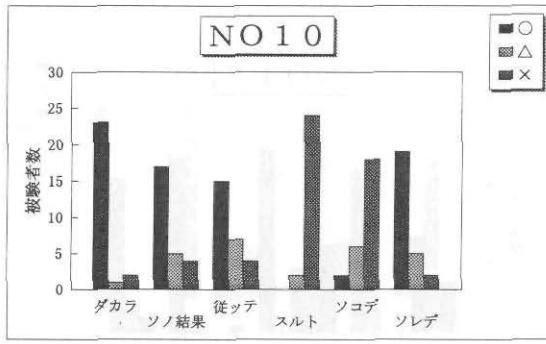
ＮＯ９　①今までの車は古くなってしまった。
②新しいのを買うつもりです。

ＮＯ９	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	26	0	17	0	19	16
△	0	7	6	1	3	7
×	0	19	3	25	4	3



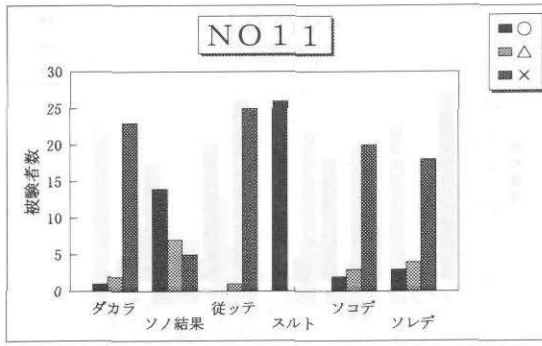
ＮＯ10　①京都は千年もの間日本の都であった。
②古い伝統が今も残っている。

ＮＯ10	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	23	17	15	0	2	19
△	1	5	7	2	6	5
×	2	4	4	24	18	2



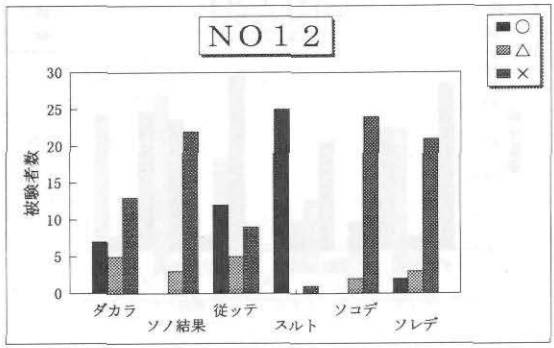
NO11　①おばあさんが桃を二つに割りました。
　　②元気な男の子が飛び出してきました。

NO11	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	1	14	0	26	2	3
△	2	7	1	0	3	4
×	23	5	25	0	20	18



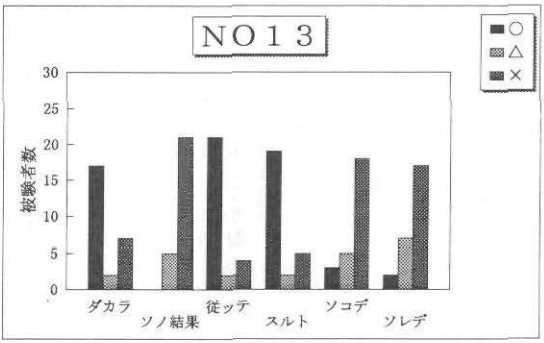
NO12　①日本の人口は1億3千万人ぐらいで
　　東京にはその十分の一が住んでいます。
　　②東京の人口は1千3百万人くらいですか

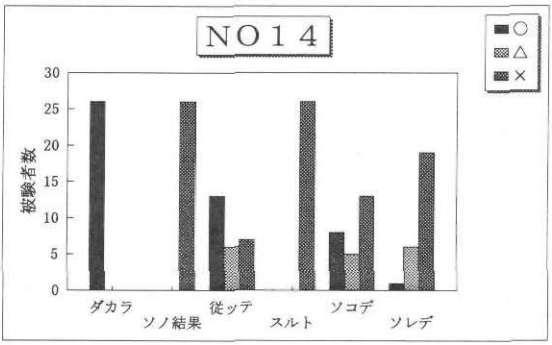
NO12	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	7	0	12	25	0	2
△	5	3	5	0	2	3
×	13	22	9	1	24	21



ＮＯ13　①サラ金に追われていたＡ氏が大金をもっているという噂だ。
②やはりＡ氏は犯人に違いない。

ＮＯ13	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	17	0	21	19	3	2
△	2	5	2	2	5	7
×	7	21	4	5	18	17



ＮＯ14　①もうあまり時間がない。
②タクシーで駅へ急ごう。

ＮＯ14	ダカラ	ソノ結果	従ッテ	スルト	ソコデ	ソレデ
○	26	0	13	0	8	1
△	0	0	6	0	5	6
×	0	26	7	26	13	19